

「平和」について考え、自分の考えを発信する
 ～「平和のとりでを築く」(光村六年)の発展として文章を書く～

江田島市立高田小学校 東 克則

1 実践の趣旨

文章を書くことができないのは、書こうとすることに対する知識・経験が不足しているという要因が大きい。書くことに対する意欲が起こらないという要因もある。「書きたい」「書かなければ」という思いが起こるかどうかは、やはり目的意識が大きなウエイトを占めている。では、目的意識がはっきりしていれば、意欲的に必要な情報を集め、取捨選択し、相手に意図が伝わる文章を書くことに取り組むことができるのか。

昨年度、文学的な文章を一読総合的な手法で扱い、「ひとりよみ」の有効性を確認することができた。今年度は、その学級で説明的な文章を扱い、「平和」に関する意欲を高め、そのことをもとに見聞を広げて自分の考えをまとめ、文章にして発信させたいと考えた。

2 実践の概要

(1) 単元名

「筆者の考えを受け止め、自分の考えを伝えよう」

(2) 単元の目標

- 「平和」について関心をもち、読んだり、話し合ったり、いろいろな資料を基に自分の考えを書いたりしようとする。(関心・意欲・態度)
- 「平和のとりでを築く」に込められた筆者の願いをつかむとともに、自分はどのように考えるかをまとめる。(C 読むこと ウ)
- 目的や意図に応じて、自分の考えを事象と照らし合わせながら効果的に書くことができる。(B 書くこと ア エ)

(3) 指導計画 (全 15 時間)

次	学習過程	時	学習活動
一	学習計画を立て、学習の構えをつくる。	①	学習計画を立て、読みのめあてをつかむ。
		②	全文を読み、難語句を調べる。
		③	文章の全体を大まかにつかむ。(各段落の要約文を書く。)
二	「平和のとりでを築く」を読み、筆者の伝えたいことを考える。	④	1 段落～5 段落
		⑤	6 段落～10 段落
		⑥	11 段落～13 段落
		⑦	筆者の考えをノートにまとめる。
三	いろいろな資料を基に、「平和」についての自分の考えを発信する。	⑧	発信方法を考える。
		⑨	必要な資料を読んだり、映像・写真、その他文章を書くための
		⑩	材料を集めたりする。
		⑪	構成を考え、材料を選び「平和」についての文章を書きまとめる。
四	学習のまとめをする。	⑫	
		⑬	「インターネットと学習」を読む。
		⑭	友だちの文章を読み、感想を交流する。
		⑮	学習の定着状況を確認する。

※この後、他校との交流をして、さらに考えの広がりがあった。

(4)手だてと授業の様子

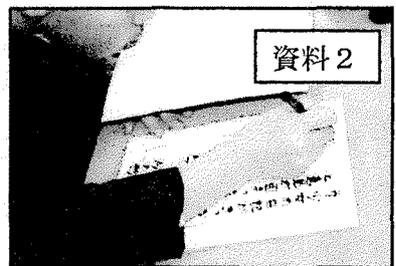
① 第一次

【学習計画を立てさせた】

学習計画は指導計画と表裏一体である。昨年度「学習計画を立てる」という経験をさせたことをもとに、児童自身で学習を進めるための第一歩として、この単元の学習計画を立てさせた。高学年であれば、2～3単元経験を積むことにより、自分たちで進めることができるようになる。(資料1)

【段落ごとの要約文を書かせた】

文章全体の構成を大まかにつかませるため、段落ごとの要約文を書かせた。①段落は、一斉指導をし、②段落以降は、児童一人一人に簡易ホワイトボード(資料2)を持たせ、学級担任と二人で段落ごとにチェックした。要約文例(資料3)を作成しておき、適否については、あらかじめ学級担任と基準を決めておいた。
(・30文字以内 ・体言止め ・キーワード)



資料2

【「学び合い学習」を取り入れた1】

このとき、「ペアトーク」「フリートーク」をして、同じ段落に取組んでいる児童どうしがキーワード等についての話し合いをし、自分の要約文を書くときの参考にした。

資料3

② 第二次

【「ひとりよみ」をさせ、児童の主体的な読みをさせた】

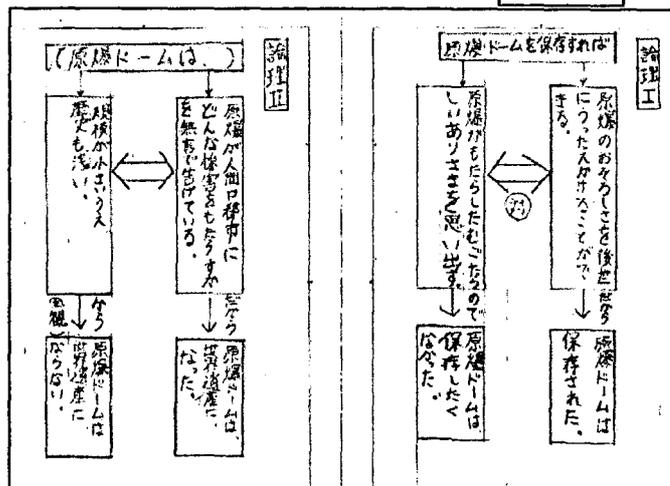
昨年度と同様、一読総合法の重要な手法である「ひとりよみ」をさせた。これは、児童一人一人のこれまでの学習の蓄積が生きてくるものであり、それまでの「指導」がそこに現れてくる。この「ひとりよみ」に書かれる児童の「読み」は、児童の実態そのものである。これを授業に生かすことが大切である。(資料4)

資料4

【「学び合い学習」を取り入れた2】

内容把握に関することについては、「ペアトーク」「フリートーク」で読み取っていった。みんなと一緒に考えてみたいことについては、「一斉トーク」の形をとり、全体で話し合った。この教材文で押さえておきたかった「対論理」については、児童から出された「どうして、一少女の日記で保存へと意見が固まったのだろう。」という問いかけをもとにした話し合いでスムーズに指導することができた。

(資料5)



③ 第三次

【社会見学・社会科学習とリンクさせた】

原爆資料館を訪問し、文章や映像・画像だけではつかみきれないことを体感させた。また、第二次世界大戦についても社会科の歴史学習とリンクさせた。

【能美図書館と連携した】

保護者の中に能美図書館の職員がおられるので、学習内容を伝えて、図書館にある「原爆」・「平和」に関する本や資料を選んでいただいた。40冊近い原子爆弾に関する資料・解説・手記・絵本・写真などいろいろなジャンルの本や資料を教室で読むことができた。

【他校との交流をした】

他校と文集を交換し、意見交流をすることを伝えることによって、同年齢の児童の書いた文章を読むことができるようにした。大人に読んでもらうのとはまたちがった緊張感があり、文章を書く上での意欲づけにもつながって刺激にもなった。また、自分の書いた文章に対して肯定的な意見が同年齢の子どもから返ってきたので励みになったようだ。(来年度同じ中学に進学予定)

④ 第四次

【原爆資料館と連携した】

第三次の「発信方法を考える」とき、「原爆資料館で学習を深めることができたので、できた文集を資料館の館長さんに贈ろう」ということになった。後日、資料館から礼状と資料館情報資料室にて保存されるという旨の手紙が届いた。館長さんからの礼状の中には、「いろいろな資料をもとに自分なりの考えをまとめあげて書かれた素晴らしい文章であること」「文章を書くとき平和記念資料館が役に立っていてうれしいということ」そして、「平和記念資料館は、これからも核廃絶を訴え続けるということ」が書かれていた。返事をもらうことで達成感を味わうことができた。

3 成果と課題

世界情勢をつかむということに関して、子どもたちがどのように現状をとらえているのかを的確に把握していない状態からスタートしたので、書く段階になって個別の指導が必要になった。

また、発達段階の違いがあり、複雑な世の中の動きが理解できない児童にとっては、個々の事象が点としてしか認識できないということが課題である。

しかし、世界の中にはいろいろな立場の人たちがいて、核兵器開発や「核抑止論」「核の傘」等について学習することができ、ちがった立場の意見について考えてみるという経験ができた。

「平和のとりでを築く」を学習して

私は、この学習を通して、今まで深く考えていなかったことを考えることができた。

最初、原爆や戦争についていろいろな書きもんで来た。

原爆の被害を受けた人はどんなことを思ったのだろうか。原爆はなぜ広島に落とされたのだろうか。なぜ戦争をするのだろうか。今、世界の中で戦争をしている国はあるのだろうか。

私たち六年生は、総合的な学習の時間や国語の時間を使って、これらのことをはじめ、世界にはどのような考えをもっている人たちがいるのかを調べることができた。そして、全校の前で学習したことを発表した。

戦争が始まるのは、国と国とのしよとつがあつてそれが話し合いで解決できなかったとき。しよとつがおきるのは、物・お金・土地のうばいあい、信じている宗教による考え方のちがいが原因だということだ。お互いにくしみ合うようになるのかもしれない。にくしみ合ったまま、話し合ひでなくばう力で相手をおさえつけようとする。より強力なはい力を持つ兵器を求めてつくれたのが核兵器だった。

世界の中には、私たちとあまり年のちがわない兵士もいると知った。おさない子どもまで戦争によつて命を落とすなんて、悲しすぎる。戦争は、人々を苦しめ、追いつめていくものだと思う。そして、その追いつめられた結果、核兵器を使つてたくさん命をうばう。戦争をし、核兵器を使うことがみんなの幸せにつながると思えない。

私は、みんなにとつての幸せにつながることを、これからは考えていく必要があると思う。暴力がなく世界のたれとでも仲良くすることが必要だと思う。そして、それが「平和」だと思う。

「平和のとりでを築く」とは

平和を築きたいのならば、まずは核兵器をなくせばいい、とぼくは考える。核兵器を持つているということが何の得にもならないし、使うとどうなるかを本気で考えられる人たちであれば、命をうばうだけで、あとには何も残らないことがわかるだろうから。

しかし、今、世界の中では、核兵器を持つている国や、戦争状態にある国もある。二十数カ国・地域で戦争状態だそう。戦争が起る原因は、「土地を手に入れるため」「自分の国はほかの国よりも強いと認めさせるため」「信じている宗教がちがうため」、そして、「今やつている争いをやめさせるため」ということだ。戦争は、兵士だけでなく、ふつうの市民も、子どももまきこむ。兵士にもつみはないが、ふつうの市民や子どもにもつみはない。特に、子どもには、無限に広がる未来がある。

ぼくは、家族に核兵器のことについて聞いてみた。「核はいらないもの。あつてはいけないものだ。」という意見だった。ぼくも同じ意見だ。核兵器でほかの国をおどかすというけれど、人の命をうばうということをおどかしているのだろうか。

核兵器を持つている国は、アメリカ・ロシア・イギリス・フランス・中国・インド・パキスタン・イスラエルの八カ国だ。ロシアは五千発以上、アメリカも四千発以上持つている。「核抑止論」にしたがつると、それに負けないようにとどんどん核兵器の数が増えていることになるのか。

今、オバマ大統領の「ブラハ演説」そして、国連の「核なき世界」の決議という流れになつてきている。

「平和のとりでを築く」で、大牟田稔さんが書いておられた「未来の世界で核兵器を二度と使つてはいけない、いや、核兵器はむしろ不必要だ」という考え方が示されている。

ぼくたち一人一人が、この考え方をしっかりと持つて、これからの世界を築いていく必要があると考える。

「戦争・核兵器」について

戦争は何もかもうばいます。建物、人々の生活、そして、大切な家族、友達命をうばいます。戦争をするのはなぜなのか。それぞれの戦争で、いろいろな理由があつたと思います。お金や物のうばい合ひ、領土のうばい合ひ、信じている宗教のちがいなどです。

六年生でいっしょに見た「ヒバクシャからの手紙」の中では、「憎悪の連鎖」ということばで言われていました。おたがいに「にくらしい」と思う気持ちがあるから合えないうちにそれぞれに深まっていくということです。

ぼくたちのおだんの生活の中でも、「にくらしい」という気持ちがうまれてくることがあります。それは、自分の考えていることが相手にうまく伝えられないときです。そのとき、相手の気持ちもわかつていないと思います。話し合ひが大切なことはわかつていても、そういつたときは、ついつい自分のことだけを考へてしまつて、けんかになつてしまいます。

このことが、国と国との場合には、「戦争」ということになるのでしょうか。そうすると、やはり、どこかで「憎悪の連鎖」をやめるための話し合ひということが大切になつてきます。

しかし、実際にはなかなか話し合ひで分かり合ひということがむずかしい場合もあるようです。そのときに出てきたのが「核兵器」だと思います。話し合ひでなく、より大きい力で相手に立ち向かうということ。たつた一発で多くの命をうばつてしまふ「核兵器」。相手をおどして、自分の国が強いぞと思ひ知らせるために核を持つ。

原爆のことについて、家族でも話してみました。なぜ、広島に落とされたのか。原爆でなくなつた人たちの気持ちはどうだったのか。「核兵器」は無くすことができるのか。

広島が実験に使われたこと、原爆で爆風を受けいっしゅんでなくなつた人のこと、のどがかわいて「水が飲みたい。」と言つているのに「死ぬからだめだ。」と言つて飲ませないつらさなどを話しました。そして、こんなつらい思いをした人々の思いを生かして「核兵器はなくすべきた」ということになりました。

「核兵器」を持つていれば、相手をいかくし、戦争がおきないという人たちがいます。だけど、それはいいわけだと思ひます。分かり合ひのための方法を考へることが大切だと思います。この前テレビで見た「核兵器は必要か」という討論番組で、司会の人々が「国と国と話し合ひ、理解しあうことが大切だ。そして、そのための努力をすることが大切だ。」と言つていました。

「にくしみ」を「分かり合ひ」に変えていく努力が大切だと思います。

核兵器をなくして平和な世界に

ぼくは「核兵器をなくす」という意見に賛成です。インターネットで調べている中で、「核抑止論とは何ですか。なぜ、核廃絶ができないのですか。」という質問がありました。それに対する「ベストアンサー」として、次のような回答が書かれています。

「核抑止論とは、『核兵器を持つていれば、敵が攻めてくる』ことはない。」という考え方です。もし、核兵器を廃絶したら、核抑止力がなくなり、アメリカと中国やロシアとの戦争などが起きる可能性が出てきますし、今より確実に戦争が増えます。これは、世界平和が大きく遠ざかったと言えるでしょう。日本にとって良いことではありません。」

その他の回答の中には、「どこかの国が強力な武器を持つていれば、自衛のために同じ武器をつくる。そして、保有する国が増えてしまつて收拾がつかない。世界中の核保有国がいつせいに核をなくせばいいのはたれでも知っていることですが、現実的にはそうはいかないのです。」というものもありました。

ぼくは考えました。核兵器という強力な武器がないと国と国とが仲良くできないのかと。話し合いで解決する方法はないのかと。「平和のとりでを築く」とも、原爆のことを調べていくうちに、こんなひどい武器は、あつてはならないという思いがより強くなったからです。

核兵器をなくすということとあわせて、戦争についても考えました。戦争が起る原因は、石油や資源や領土を手に入れるためということや、宗教のちがいによるといふことだそうです。くわしいことは、ぼくにはまだよく分かりませんが、国と国とが意見がぶつかり、戦争になつてしまったということだと思えます。自分の国にとつて都合のいいようにするために、ほかの国のことを考えられなくて戦争になり、より強力な武器をつくつてきたということだと思えます。

六年生のみんで見たテレビの中で、「外交」ということを言っていました。戦争で解決するのではなく、「外交」、つまり、話し合いで解決できないかということ。それは現実的ではないという意見もありました。敵が攻めてきたらどうするかというのです。そんなことがないように、話し合を進めていくことが大切だと思ふのです。相手を思いやるやさしさとおだやかな気持ちで対応できないのでしょうか。

ぼくにとつて「平和」とは、核兵器もなく戦争もない世の中のことです。そのためには、おたがいを理解し合うという心が大切なのだと思ひます。

「平和のとりでを築く」を学習して

私たちは、まず、「平和のとりでを築く」で大牟田稔さんの伝えたかったことはどんなことなのかを考えた。

原爆ドームは、もともと、物産陳列館として建てられ、多くの市民に親しまれてきたこと。昭和二十年八月六日午前八時十五分、一発の原子爆弾で炎上し、多くの市民も命をうばわれたこと。残つた傷だらけの建物を保存するか、それとも取りこわしてしまうかで議論が続き、貞子さんの日記がきっかけで保存されることになったこと。そして、原爆ドームは、核兵器が不必要であることを警告する記念碑であること。だから、「原爆ドームは心に平和のとりでを築くための世界の遺産だ」ということだ。

次に、原子爆弾についてくわしく調べた。

なぜ原子爆弾がつくられたのか。なぜ広島や長崎に落とされたのか。どんな被害があつたのか。そして、被害を受けた人々は、どんな気持ちでいたのか。

私が、特に心に残つたのは、原爆資料館で見た、「リトルボーイ」のもけいだ。私の背よりは大きい、でも、たつたこれくらいの大さきの爆弾で、十四万人の命をうばつたなんて、とんでもない爆弾だ。こんな爆弾のせいで、広島や長崎がめちゃくちゃになつて、多くの人が死んでいった。被爆したとき、家族がいなくなり、一人ぼっちになるつらさ。両親をなくした子が、どんなに辛い思いをしたかと考えると、原爆は絶対あつてはならないと強く思う。

最後に、原爆について調べたことを、全校の前で発表した。

一年生から五年生までの人にわかりやすくしようと工夫した。ペーパーサートで案内役をつくり、「原子爆弾が広島に落とされたわけ」「原子爆弾の被害」「原子爆弾の」「原子爆弾の」というグループで発表していた。私たち自身も、まとめることで整理することができた。

原爆について調べた中で、もう一つ私の心に強く残つているのは、核兵器を持つたほうがいいのかという考え方をしている人たちがいるということだ。あることに対して反対の意見があるということにはわかるが、この「核兵器」については、賛成する人がいるなんて思つてもいなかつた。核兵器を持つていれば、おたがいにこわくてうげきすることができないから平和な世界がつつくだうらうということなのか。しかし、核兵器があれば、それを使つたとき、世界中の人々の命や生活がなくなつてしまう。では、使わなければならないのか。使わないのだったら、持つておかなくてもいいのではないのか。

何だか、今の私の頭の中ではよくわからないことが多すぎる。これから、いろいろなことを勉強していきたい。(この「平和」についてまた考えてみたい。)